

八月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

おやぢ失墜

武田 弘之 神奈川県

御霊会ごりやうゑの山鉾巡行中止させ古都に新型コロナウイルスはびこる

平凡な、あのなつかしき生活を取り戻したしコロナ禍の日々
今の世に地震、雷、火事、コロナ恐ろし親父おやぢは恐ろしからず

早急に送ると総理言ひ切りしマスク届かず春すぎて夏

「り」は「解」、「とりま」は「とりあへず、まあ」の意と若者言葉いよよ謎めく

コロナ自粛

清水 正子 神奈川県

少年の日より育てしサボテンの花が咲いたと写メ送りきぬ

サイレント・キャリアかも知れぬ男おとこの孫に会へず就職祝わたせず

出社なくオンライン研修の日々ならむコロナ自粛の街は燕見ず
祖母われもステイホームの日々すこすコロナ肥りを気かけながら
スパーのお隣りはコロナ休業す「日本がんばれ」と貼り紙をして

斧足

小嶋 一郎 佐賀

この昼の何たる暇ぞ十五年付き合ふ三毛の目脂拭くなど
満開のさくら百本見巡りて満ち足りるとは飽くといふこと
透きとほるバックの中の浅蜷らはけふを限りの斧足おそくを伸ばす
富士山頂かつて極めし脚なればピルの三階ぐらゐ厭ふな
このところ飲み食ひ減りて体重は五十七キロまづは良とす

口角を上げる

福士 りか 青森

意識して口角上げる生徒らに会はねば大きく笑ふことなし
オンライン会議をすればいつもより発言少なし短く終はる
若苗のそよぐ彼方に残雪の岩木嶺ひかる 深呼吸せよ
アベノマスク、アホノミクスと揶揄すれどそれでは開かぬ自由の扉
前を向き弁当食べる生徒らの視線もぞもぞ友だちに向く

☆

☆



仲 宗角 三重

風伝を越えし湯宿がササユリがどつと咲いたと今年も伝へ来
出しぶれる息子にのみ二泊すると宿におきゆくこれでいいのだ
マタタビの白き花咲くかたへきてオタマジャクシ捕る少年
どうしたかホタルまで出でにぎはへりサンマ揚らぬ一日だった
タイサンボクの大き花咲きこのへんど山川をくる

水島 晴子 兵庫

奥村 晃 作* 東京

たちまちにめぐりを囲みうねりまた固まりてあり危惧や恐怖は
感染を怖るるころ空爆に脅えし記憶とともにつめたし
拳めく枇杷の丸実よせんだんの花かげにして淡く色注す
ま白なる蓄なりしが朝の日に碧き四葩の花ひらきをり
無観客ダービーが映り思ひ出づ旅寝の人と馬を詠む歌

杜沢 光一郎 埼玉

自転車といふものの怖さ危なさを自家用車手離してあらためて知る
自動車免許証の自主返納の決断はタバコをやめるよりも難しと知る
高齢者多くをれども免許証の更新者ばかりで返納者はまれ
自家用車にて人を殺めず傷つけずにすみし四十年を僥倖と思ふ
立石寺までが妻とのドライブの最長距離全山の紅葉を今に忘れず

高野 公彦 千葉

安倍といふ主峰を囲みジャンタルムあまた寄り添ひみな霧の中
天国と地獄のあひの人間に住みて(三密)あるも楽しき
恐ろしさの余り泣きつつ生まれ来てやがて世に馴れみんな世を去る
へあんたまだ子供やのうと母言はむわが死の際の宙に来て
親しみをもちて横より眺めしよ少し猫背の百済観音

森重 香代子 山口

朝仕舞終へればたちまちおそひくる睡気は老いの徴なるべし
受話器もつその間も雪は積むといふ東京都心、わが知らぬ街
凌霄花を伐りしかば庭の方々に赫き芽を吹く怨嗟のごとく
わあわあと山に戻りて啼く鴉手もと暮れつつ庭の草抜く
後ろをば振り向かざるが前向きといふにもあらず方途なきいま

日影 康子 富山

茗庭へ喚声あげて伸びあがる杉菜の群落に風のさざ波
ネット授業を自室に受講し孤独なり大学へ入りし孫のコロナ禍
世界ちゆうが大変なことになつてゐる今こそ短歌の力信じたし
ひかりつつ嫩草なかへ散るさくら花といへども別れはさみし
気候崩壊でアジアに人が住めずなる日が来るといふ二〇五〇年



古屋 祥子 群馬

いたい痛いたただ痛い、呻きつつなほも恨めり夜の長さを
市中より離れし市外へ移転せる日赤は大方救急で入る
救急車次ぎて通れる病院前、大連れ人は道の端に退く
娘に抱かれ眠れるままに逝きたけど病院ここは治療が専ら

影山 一男 千葉

自粛して見てゐるテレビ志村けんのコントに笑ひまた泣かされる
視聴率のために何でもするテレビ感染源はおまへだつたか
基礎疾患もつ高齢者なにもせず何もできずに歌つくりをり
オフラインされつつ水木、つつし過ぎあぢさゐの毬ふくらみ始む
うすき霽かかりし道を歩みゆく修行僧かも君も私も

桑原 正紀 東京

ステイホームの五月のひと日映像でミュージアム巡りしてあそびたり
股長のダビデの像を見上げ立つ少女はとほきまなざしをせり
性のこと沓けるらし星あふぐさまに少女はダビデをあふぐ
深宇宙おもひみること性おもふらしき少女の頬のうす紅
ルネサンスとベスト・パンデミックの関はりを調べてひと日暮れ果てにけり

狩野 一男 東京

春さなかスタートしたるコロナ禍は暑い盛りも疾走せむか
父の木の桐に花咲く五月来て二日目我は年を取りたる
コロナ禍も、北の五月はすばらしい妻も北者われも北者
生きてゐる限り忘れず生きゆかむ我らの憲法記念日の日を
のみぐすり飲み忘れても持ちわすれしてはならないおくすり手帳

宮里 信輝 神奈川

誰からも掴まれるなく吊り草ら揺れをりパンデミックの車内
吊り草やドアノブ達は困りをり人のてのひらから厭はれて
エレベーターのボタン押すべくポケットに数本ひそみある爪楊枝
爪楊枝どう思ひゐるエレベーターのボタンを押せる大役を得て
エレベーターのボタン驚く「指でなく爪楊枝にて押されるなんて」

岡崎 康行 新潟

壮大を人はよろこびあやめ園六十万株咲かせ人呼ぶ
谷ふかく湧きたる水のあふれつつすてにいく株のあやめ洗ひつ
咲ききりしいのち摘まれて花菖蒲散るなき花のなきがらの山
植木屋の目を入れざりし功労かやまばとに雉子、はしぶとがくる
あやめの根うるほしし水流れゆき越の水田に注ぎてやまず

小島 ゆかり 東京

やはらかき葉あひ葉あひにひそみゐるあぢさゐの白緑のつぼみ
花散歩、若葉散歩のできぬまま死なせたくなし散歩好きの母を
一つ一つに「コジマシズコ」と名前書きショートステイの荷物揃へぬ
介護負担限度額申請 野ぶだうの影さすやうなかなしみがまた
マスクもうはづしてよいか深呼吸すれば山繭いろのゆふぞら

木 畑 紀 子 京 都

冬すぎて春すぎて夏 外せざるマスク越しにも青葉がにほ
いっしかに葉桜の闇おもおもと鬱のかたまり抱へしづまる
こぼれ種ポビーの朱が揺れてをりコロナウイルスの脅かしのごと
栗の木に紐花、桑の木に穂花 あなひそやかに開けてゆく季
野辺をさへたれもあゆまず遠森に啼けるは死出の田長ならずや

島 田 暉 神奈川

コロナ禍の死者の出でたる医院なりテイクアウトの診察されぬ
かかりつけの医院に行けど入れられずカルテを持ちし医師と語らふ
コロナ禍に遭はぬ眼医者や歯医者でもまづ計られぬわが体温を
ウイルスに蝕まれゆく人の町人影見えぬ電車が走る
お互ひの言葉の種を芽吹かせて久しぶりなる笑顔を交はす

大 松 達 知 * 東 京

私心なし悪気なしまた知性なし差別もなくてウイルスという
神棚に半紙を貼って牛鍋を食べていたとぞ明治人^{びと}らは
尺八屋いつも扉は閉まれども聞こえてくれれば立ち止まるなり
読めませんわかりませんと月ごとに言いに来る黒いスツールのうえ
小便のときにも座るわが家への愛か妻への愛かは知らず



田 宮 朋 子 新 潟

けんけん甲高く鳴くこゑのして覗けば庭に雉子がゐるゐる
仁清作〈色絵雉香炉〉のごとき雄雉子一羽くさむらのなか
派手なかほ上へと向けておもむろに母衣打ちしつづ雉子は鳴きたり
あけがたの庭の繁みをよぎりゆく昔男のやうな雄雉子
いづこより来たりいづこへ去りにしや雉子を見しひと村に幾たり

津 金 規 雄 神奈川

花の形そのままに散るさくらあり花心に滲むくれなるぞ濃き
温暖化のみならずして地球規模コロナウイルスはヒトが産みしか
国家といふ生き物も持つ強きエゴ 危機迫りたる時に現はる
黄は五弁白は四弁に花ひらく山吹おのがじしの命よ
コロナ禍に家籠る日々妻と語るよしなし事を手に載せて愛づ

小 山 富 紀 子 京 都

ちりめんの濃き紫に紅絹^{もみ}のひぼ付けてさせたや芸妓にマスク
お坊さまなかなかおしやれ藍染の作務衣と共の裂地のマスク
マスクにと布地をさがす棚の奥マスク出で来ぬ なんやこれ、いつの
数年後マスク出で来る棚の奥 なんやこれ、ああアベノマスクや
あれもこれも笑ひ話になりぬらむ新型コロナ収束の後

後 藤 美 子 北 海 道

わがためにわが買ひきたるカーネーション鉢にあふれて花二十輪
礼拝が休会となり母の日の日曜をこもる コロナ蔓延
想像力欠けたる政治医療現場の必要資材日々に逼迫す
〈アベノマスク〉点検費用に八百万税金つかふこれが現実
「忘却は生存のための能力」と読みてわづかに安堵すさびし



藤野 早苗 福岡

子らの手に削られてゆく砂山の真中に立てる棒があやふい
子ら去りてとりあへずまだ立つてゐる砂山の棒それはわたくし
真先に自肅迫られ興行の四百失せし夫の生業

いのちより大事はなくて終息の日まで自肅す命を懸けて
人間は怖いとため息つきながら鰯の頭すとんと落とす

風間 博夫 千葉

首都封鎖するといふデマ聞いたときデマと思はず米五キロ買ふ
四人住まひなれど二枚の布マスク贈るとふ二人無視されてます
五千万世帯にマスク送るのに数十億円かかつてしまふ
布マスク感染防止になりますか飛散防止にはなるといふけど
生活を下支へする専門家とふ意識なし大宰相安倍に

田中 愛子 埼玉

人通りすくなき街のブティックに綿のレースのマスクを買へり
はじめてのビデオ電話ではなすとき母は愛称でわれを呼びたり
賭けマージャンもちかけたるはいづれならん検察官と新聞記者と
余人もて代へたき大臣おとどいくたりかコロナウイルスの陰より見え来
買ひ替へで役目終へたるスマートフォン目覚しとして枕辺に置く

橘 芳園 新潟

退学をさせられし子も寺を継ぎ仏はゐると言ひをるといふ
「先生の声がいやだから」grammarの赤字とりし分けを言ひくる
教師家業三十八年わが声を聞きさへ嫌な子きつとゐたはず
「弟子一人モモタズ」と言ひし親鸞になぞらへむ教へ子と生徒を呼ばず
僧、教師辞めてもわれは地理学徒歩きまはるをいきがひとせり

水 上 比呂美 東京

青短の図書館わきの椿の木たくさんの実をほろほろ落とす
椿の実百のポットに蔵しまはれて百の芽を出すキャンパスの隅
今年度で青山学院女子短大消滅せうめつします白亜の校舎
四十九から二十年間通ひる科目等履修生のわたくし

赤、白の椿の苗をわが庭に植ゑたり花が咲くは五年後

鈴木 竹志 愛知

桐の花咲きゐる橋のたもとより五百歩ほどで母のホームに
この春の終りに咲ける桐の花うすむらさきが今年は染みる
隠棲はかくなるものかと眺めたり田の隅じに息ふ番の鴨を
われよりも一歳上の火野正平チャリンコ回しをいまだに続
年齢はどうでもよくて今何がしたいかそれが問題なのだ

原 賀 環子 東京

くれなる科くれなる属のおももちの命のいろよ紅の薔薇
挿し木せむころ活発あたらしき薔薇のすみかの鉢をぎんみす
スコップでたがやす土のさくさくと、ざつくざつくの鍬をおもへり
灯刻は明治のことは ほほづゑの鷗外そぞろ歩きの荷風
灯刻はヒトの夕ぐれ家居して自肅のあかしランプをともす

水上 芙季 東京

マスクしてだんだん顔が無くなつて誰でもなくて調布を歩く再放送、再読、写真整理などみな懐古主義になりさうな春久々に肉声で名を呼ばれゐてレモンソーダの浮力生れたりはつなつの車両にマスクのわれ一人(さそりの駅)に行きさうな夜寝違へた左の首の疼痛が昨日とちがふ一日を課する

大野 英子 福岡

会へぬまま過ぎすいくたりかけがへのなき面影が浮かびては消ゆ双子座が朝あしたの空にひかりをりいつもいつしよにゐられていいね鎖されたる店舗の並ぶまちなかを狂れしがごとくさまよふ老女新緑を照らす朝の陽鮮らけく眩しもけふから通常勤務散りながら新葉がそだつ楠の木のやうにはあらず危ふきにつぼん

松尾 祥子 東京

青若葉男の子女の子を膝に乗せ歌へり翼もたざるわれはカマキリに大泣きする子ほーらほら躑躅の蜜はこんな甘いSNS発信をせぬ人々のこゑは雨月の闇にまたたく一歳の子に指示されて四世代七人毎朝測る体温コロナ禍ももかに百日籠もれば生きるとは食事、睡眠、運動、短歌



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八―一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一―二二―二〇

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六―三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一―一四―六